

「さかさま大学KJ」を通じた学び合いの機会創出

社会学部 社会学科 古川 隆 司

1. 本プログラムの意義と目的

本プログラムは、これまで社会学科で特色ある教育として実施されてきた「さかさま大学」を、参加対象を全学部に拡大して企画した。さかさま大学は、合宿形式によるKJ法の学習で、5人前後のグループでテーマを深める議論をし、その成果を図解にして発表・討議を行うものである。KJ法を考案し普及に努めた故川喜田二郎はこれを発想法と名づけており（川喜田二郎『発想法』中公新書、1967）、さかさま大学の実施にあたって、さまざまな異なる考えを出し合い、議論と学生相互の学び合いと理解を重視してきた。また川喜田研究所の研修を受けた社会学科教員がインストラクターを務めてきた。

すでに社会学部社会学科では、平成22年度以降学科教育自体に特色があるとの主張をもとに、学科として特色ある教育を実施しない方針である。またこれまでインストラクターを務めてきた教員も退職する。このため本プログラムは、従来のさかさま大学を継承しつつもこの学び合いのプログラムが、全学特色ある教育として成立するか、試行的な実施を通じた検証を行うこととした。

2. 参加者の募集

実施計画について協力を申し出た社会学科教員と打ち合わせ、開催要項を作成した。従来は2泊3日で実施してきたプログラムであるが、本事業の予算執行等の制約から1泊2日に縮小し、年内に実施することとした。できるだけ＜多様な＞参加者を募るところから始めた。学部・学年を横断的に、また大学内外で卒業生等を含めた打診を行うこととした。

開催要項は、現在多くの学生の協力を得て運営が進んでいる学習支援室および教育研究所の協力を得て配布を依頼し、運営にかかわる教職員に呼びかけの協力を依頼した。この他、筆者が指導するゼミ等へ呼びかけを行った。この結果、学習支援室のピアサポーターを務める学生や学生FDスタッフの学生等7名（心理学部・社会学部ほか）、教員3名（筆者・社会学部・経済学部）にて実施することとなった。うち過去のさかさま大学に参加経験のある者は2名、他はKJ法の学習も初体験であった。

3. 実施内容

さかさま大学KJは以下の通り実施した。

開催日時：2009（平成21）年12月19日（土）、20日（日）

会場：グリーンヒルサントピア（滋賀県甲賀市水口町）

初日、会場入りした後昼食をとり、まず今回行うKJ法の概要について説明を行ったあと、メモを配布し、それぞれから自己紹介と参加した動機をそれぞれから発表、質疑応答を行った。参加希望者には討議したいテーマを考えてもらっており、質疑応答を通じメンバー相互の理解を図ると同時に、テーマ設定を行うことが目的であった。

自己紹介と質疑応答を終え、グループ分けを行った。教員がインストラクターを務める形で2グループを編成、経験を考慮した。その後グループごとに、①テーマ設定、②テーマからグループでの認識をカード配置・図解化、のラウンドを行った。

2日目は午前③質疑応答、④再度テーマ設定、⑤認識の共有と図解化を進めた。午後に⑥発表と質疑応答を行った。各ラウンドはグループで進行や意見交換の進み具合で異なり、相互の意見を尊重し合う形でカード化し、模造紙を囲んで各々からカードを発表しつつ質疑応答を何度も行う形で進めた。

4. 結果

結果はKJ法のA型図解として模造紙にまとめ、ホワイトボードに貼り出して質疑応答を行った。メンバーそれぞれが図解について考察を深めることが目的であるため、本来はレポートとして文章化を行うのであるが、今回は開催時期から学期末試験を考慮し、図解の形でまとめとした（添付図1・図2）。

5. まとめ

グループによる討議と質疑応答はブレインストーミングの要領であり、所属・学年・経験などの差が大きいほどグループ内での相互理解が不可欠である。また、カードに自分の意見を表現していく表現力や他者のカードを読解する力などが養われる。今回の企画では、短期間であるが参加者の多様性から、相互に学び合う関係を築き深めていけたと考えられる。今後小規模であれ年度内に複数回開催することで、参加者の多様性を確保しつつ、学生が相互に学び合い、知的刺激を得る機会を提供していくことが必要であると考えられる。



写真1：グループ討議



写真2：図解化した成果の発表